

火花

第 29 号

特别号～第 2 分册～

1984, 1

火花

第29号 1984. 1

特別号～第2分冊～

共産主義者同盟(火花)

(I) 構成について 三三

(II) 帝國主義批判の根本問題について 六

(a) 国家独占資本主義について 十一

(III) レーニン帝國主義批判(一九一九年綱領当該部分)に付加すべきいくつかの点について 十五

(1) 独占の拡大に伴う新たな産業予備軍の形成について 十五

(2) 資本輸出の形態変化について 十五

(3) いわゆる中進国——いわゆるサブ帝國主義について 十六

(IV) 現代帝國主義論——第三世界論について 十八

II

(I) レーニン——ロシア共産党の綱領草案・綱領 二一

(II) 共産主義者同盟革命の旗派の「綱領草案」 二九

(III) 共産主義者同盟紅旗派の「綱領」 三三

(I) 構成について

後半部の構成をいかにすべきか。そこでは、次の①②③をどのように関連で叙述するかが中心問題である。①、一九一九年綱領にまとめられた帝國主義の特徴づけ、②、①に付加すべきいわゆる「現代」帝國主義の新たな諸特質、③、現代過渡期世界階級闘争分析。この三点である。これらにたいしてどのような態度をとるかということ、は、帝國主義—独占資本主義という資本主義の発展段階とは別に新たな段階として、現代帝國主義—国家独占資本主義を措定すべきか否かという問題や、その一環でもある第三世界論(主にサミール・アミンやガーダー・フランク等の)の問題にどういう態度をとるかということを含んでおり、別の角度から言えば、原理・本質と現象・形態、原理的普遍的理論と歴史、経済と政治、ウクラードと階級闘争、等々の方法上の諸問題をいかに対象化するか、を含んでいる。現在、ブント系で綱領草案をまとめたものとして提出しているのは、革命の旗派と紅旗派である。上の諸点について彼らの草案を検討してみよう(IIIの資料参照)。(註)

① 帝國主義と現代帝國主義との段階的区分をしていないこと。

② 一九一九年綱領からとった部分を中心とした叙述が普遍的原理的理論化し、残りの現代過渡期世界分析の部分が歴史叙述化していること。

(付) 独占資本主義と国家独占資本主義という問題については、革命の旗派は、区別していないか、無自覚かであるのにたいして、紅旗派は、明らかに自覚的に両者を区分している(彼らの草案の第一五項と第二〇項とを比較せよ)。この点については後に検討する。

① については、われわれの見解と同様であり、問題はない。帝國主義と現代帝國主義とを段階的に区分すべきであるという見解を、政治党派で明確に掲げている部分はないものの、いわゆる第三世界派(アミン、フランク等)や、国内では入江節次郎などがそうした見解をとっており、明確な理論的整理や概念規定がなされないままに、かなり広く雰囲気として流布している。段階区分を何をメルクマールとして、どのような内容でなすのか、という根本問題についてはほとんどどの明確な主張はないといつてよく、あれこれの、いわゆる新現象を羅列し、また、現実の反帝民族解放闘争の高揚に乗っかって、マルクス、レーニンの限界等を云々しているに過ぎないといつても過言ではないのである。理論的には、この問題は、国家独占資本主義の問題とみてよい。というのも帝國主義という場合、それは資本主義の最高の発展段階としての帝國主義であり、帝國主義と現代帝國主義とを区分しようとする議論は、

「帝國主義とは資本主義の独占的段階である」(レーニン『帝國主義論』岩波文庫P一四五)

ということを同一のレベルで違った形で措定することに帰着するからである。こうした議論をほぼ欠落させた形で、いわゆる第三世界派の論者らは、帝國主義と第三世界との対立を中心軸として押しだすのだが、その議論は、帝國主義と現代帝國主義との区分の問題というよりは、むしろ資本主義批判の問題である。

また入江節次郎は、

「『資本論』、帝國主義論だけではなお十分ではないか。國家独占資本主義論や現代資本主義論という形でとりあげられる問題も含めた……現代帝國主義論というものも必要ではないか。／＼そのように考えていくと、結局、『『資本論』+帝國主義論+現代帝國主義論+マルクス経済学の全体系』という図式……」(『帝國主義論への道』P一八〇-一九)

と一方で述べつつ、

「現代の資本主義の世界体制の構図の原型は、古典的帝國主義期にすでに作られていたのであった。変容のなかに原型は生き……」(『帝國主義の解明』P三四)

と他方では述べ、結局段階区分については直観的措定の域を出ていない。実際上は、世界資本主義体制なるものの歴史的現象的变化を述べるにとどまっているのである。(註)

(註) 同前P二三〇三四を参照

われわれは、現代の帝國主義にたいする批判として、レーニンによる帝國主義批判が、その核心部分でなお有効であると考える。いわゆる新現象といわれる諸事項も、マルクスの経済学批判、レーニ

ンの帝國主義批判を拡張することによって分析されるし、レーニン自身がいくつかの批判的分析の端緒を遂行しているのである。

次に②の問題であるが、この点に、革命の旗派、紅旗派の草案の最大の欠陥がある。

「両者の草案では、一九一九年綱領からとられた前半部分(革命の旗派では第一四〇-一七、紅旗派では第一二〇-一七)と後半の現代過渡期世界分析の部分が明瞭に区分されている。こうした構成において、前半がレーニン時代の帝國主義批判から導かれた帝國主義に関する原理的規定となり、後半が、これをふまえた歴史形態分析(現代過渡期世界分析)となるというへ原理→歴史形態→傾向を持たざるをえない。ともに、他方では、前半があくまでレーニン時代の帝國主義から導かれたという歴史性から、前半→後半を通して全体として歴史叙述するという傾向を持たざるをえない。この帰結は、**第一に**前半部分が原理論化し、あるいは過去の歴史とみなされることによるその棚上げ、**第二に**、現実世界の分析部分たる後半部分が前半と切断されて単なる現状分析化することである。こうして実践上は、戦略・戦術主義の右往左往が導かれる。

先に述べた彼らの草案の構成が孕む二側面の幅、歴史化傾向が強く出ている革命の旗派の草案では、後半に、突然に、スターリン→毛沢東式四つの矛盾論が飛びだして、レーニン帝國主義批判の部分は完全に棚上げされ、題目化される。彼らの活動が、一方で、レーニンなどを盛んに引用して一見原則をふまえているかにもふまいつつ、実際活動上は、ズブズブの合法主義、戦略・戦術主義にひたりきっていることは、綱領上、既に明白なのだ。

一方、紅旗派はというと、「『帝國主義と世界プロレタリア革命』

「『世界プロレタリア共産主義革命の時代と世界プロレタリア独裁』として画然と区分があり、へ原理→歴史形態→分析をよりスッキリとさせて、革命の旗派のような混乱をみせてはいないとはいえ、かえって、どこまでも現実批判を貫くという点で、大きな欠陥を露呈させている。

最後まで現実批判の態度が貫かれねばならない。革命の旗派や紅旗派に典型的にみられる綱領上の態度は、斥けられるべきである。われわれはここで原則部分前半部において復権させた「レーニン→ブレハーンフ論争、レーニン→ブレハーンフ論争を想起す必要がある。ここでふまえておくべきことは次の三点である。」

①ブレハーンフ草案の「現代社会の主要な経済的特質をなすものは……」という経済学教科書風の叙述にたいするレーニン草案の「ロシアでは、商品生産がますます発展し……」というどこまでも現実をたいする批判としての叙述。

②ブレハーンフのいわゆる古い資本主義にたいする批判部分を帝國主義批判の中に解消しようとする意見にたいするレーニン、すなわち、古い資本主義は帝國主義といういわば上部構造にたいする下部構造として、現に、厳然として存在し、綱領はこの現実をはつきりと反映させねばならないとしたこと。

③②のブレハーンフ批判の中に、①のブレハーンフ批判を綱領の具体的叙述にまで貫徹させえなかったレーニンの歴史的限界性。このことは後に、スターリン、ブレハーンフの搾取のしくみ論——綱領原則部分前半の題目化(スタ・ブレハ綱領をみよ)の現出を阻止しえなかつた一因としてあつたこと。

古く資本主義をあつかつた部分において以上を復権させ、「今日商品生産は全世界を覆い、資本主義的生産関係が決定的支配を獲得している」と規定した現実批判の態度を、帝國主義・現代過渡期世界批判にも貫かねばならない。ここで再びレーニンにもどらう。資料のレーニンの三つの草案を比較してほし。

「はじめの二つの草案と最後の草案(これは成文とほとんど同一である)とを比較してみると、帝國主義のもつとも根本的な特質を述べた最初のバラグラフにおいて、現実批判に徹するという点で、大きな飛躍があることに気づくはずである。第一、第二の草案では、「世界資本主義は……帝國主義の段階に到達した。」とまず述べられ、それを受けて、「帝國主義は……そういう非常に発展した資本主義経済である」と述べられている。この叙述は、やはり、経済学教科書風の叙述、帝國主義を定義づけようとする叙述といえる。

これにたいして、第三の草案では、叙述はまったく一新され、その時代の現実のこととして帝國主義の特徴づけが与えられている。○三年綱領作成当時のレーニン草案の「ロシアでは商品生産がますます発展し……」という叙述を完全に引きついでものとなつている。この態度、これをこそわれわれは帝國主義・現代過渡期世界批判の中に復権させねばならない。一九一九年綱領から丸写しという安易な方法では絶対にダメなのだ。われわれの草案が、レーニンが明らかにした帝國主義にたいする五つの基本的特徴づけを骨格として、そこに、今日のいわゆる新現象——諸独占の社会の全ての部門への拡大、国家諸機関の組み込み、新たな産業予備軍形成、いわゆるサブ帝國主義、労働者国家、ソ連社会帝國主義を付加してそれを全体として今日の帝國主義の特徴づけとして叙述しようとしているの

はこのためである。われわれの草案は、この点で成功しているかどうか、論争は、このことをめぐってまずなされねばならない。

(ii) 帝国主義批判の根本問題について

(1)

今日の世界をレーニン時代の帝国主義と段階的に区別された現代帝国主義あるいは国家独占資本主義の時代ととらえるのではなく、あくまで帝国主義の時代ととらえる以上、**帝国主義批判の核心**を認めるところからはじめたい。

「帝国主義は、その経済の本質からすれば、独占資本主義である。」(レーニン『帝国主義』岩波版P一九九)

「帝国主義のもっとも深い経済的基礎は独占である。この独占は資本主義的独占である。すなわち、資本主義のなから発生して、資本主義、商品生産、競争という一般的环境のうちであり、しかもこの一般的环境との不断の、そして解決の道のない矛盾のうちにある独占である。」(同前P一六一)

「もし帝国主義のできるだけ簡単な定義をあたえることが必要だとすれば、帝国主義とは資本主義の独占的段階であるというべきであろう。この定義はもっとも主要なものをふくんでいるであろう。なぜなら、一方において、金融資本とは、産業家の独占団体の資本と融合している独占的な少数の巨大銀行の銀行資本であり、他方において、世界の分割とは、まだどの資本主義的強国によっても占領されていない領域のうえになんらの障

害もなく拡張せられる植民政策から、徹底的に分割されつくした地球上の領土の独占的領有という植民政策への移行だからである。」(同前P一四五)

「独占が自由競争にとってかわったことが、帝国主義の根本的な経済的特徴であり、その本質である。」(L全②「帝国主義と社会主義の分裂」P一一二)

「自由競争を排除しつつ」成立した資本主義的独占は、しかし、この自由競争を決定して排除しきるのではなく、

「自由競争のうえに、またこれとならんで存在し、このことによって、一連のとくに鋭くはげしい矛盾、軋轢、紛争をうみだす。」(レーニン『帝国主義』岩波版P一四四～一四五)

「純粹の独占ではなくて、交換や、市場や、競争や、恐慌とやらんで存在する独占——これが帝国主義一般のもっとも本質的な特質である。／＼……このように、競争と独占という、たがいに矛盾する『原則』を結合しているということ、このことこそ帝国主義の本質である……」(L全②「党綱領改正資料」P四九二～四九三)

る。

この独占資本主義が、あの有名な五つの指標、

(一) 経済生活のなかで決定的役割を演じている独占を創りだしたほどに高度の発展段階に達した、生産と資本の集積、

(二) 銀行資本と産業資本との融合と、この「金融資本」を土台とする金融寡頭制の成立、

(三) 商品輸出と区別される資本輸出がとくに重要な意義を獲得すること、

(四) 国際的な資本家の独占団体が形成されて世界を分割していること、

(五) 最大の資本主義的諸強国による地球の領土分割が完了していること。

(注) 以上はレーニン『帝国主義』岩波版P一四五～一四六より引用したものである。

をもつてあらわれるのであり、さらにこの根本的規定にもとづいて、帝国主義とは、寄生的な、または腐朽しつつある資本主義、死滅しつつある資本主義、と云うるのである。

(注) この部分については、前出の『帝国主義と社会主義の分裂』をぜひとも参照し、学ぶこと。

「帝国主義が寄生的な、または腐敗しつつある資本主義であることは、まず第一に、生産手段の私的所有のもとのあらゆる独占の特徴である腐敗の傾向に現れている。……第二に、資本主義の腐敗は、金利生活者、すなわち『利札切り』で生活する資本家の膨大な層がつくりだされていることに現れている。……第三に、資本輸出は自乗された寄生性である。第四に、『金融資本は支配をめざすものであって、自由をめざすものではない』。全線にわたる政治的反動は、帝国主義の特性である。

……第五に、領土併合と切りはなせないようにむすびついた被抑圧民族の搾取、とりわけ、ひとにぎりの『大』国による植民地の搾取は、『文明』世界を、ますます、幾億人の非文明民族の肉体にくっついた寄生虫へと変えていく。……帝国主義的大国のプロレタリアートの特権的な層は、いくぶんは、幾億人の非文明民族の費用で生活している。」(L全②「帝国主義と

社会主義の分裂」P一三～一四四)

「帝国主義が死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義であるという理由は、明らかである。資本主義から生じる独占は、すでに資本主義の死滅であり、資本主義から社会主義への移行の始まりである。」(同前P一四四)

(2)

(a) 帝国主義の経済的本質である独占——自由競争を排除しつつそれと並んで存在し、それと激しいあつれきを生みだす独占についてより詳しくみておこう。

△独占を生みだすもつとも規定的——**基底的要因は、生産と資本の集積である。**それは、資本の有機的構成の高度化、——一八世紀後半以降の産業の基軸となった重化学工業に、とくに顕著な固定資本の巨大化、コンベインション等の生産過程の縦断的横断的結合関係の発生、拡大、こうした資本の技術的基礎の変化とともに、合併、吸収等による資本集中、一経営規模の巨大化等々——としてあらわれた。この生産と資本の集中は、資本の特定部門への新規参入時の最小資本規模の増大、技術水準の高度化等によって、また平均利潤率低下傾向を防止するために、大量の原材料を使用し、大量の商品を生産し、販売するために、独占への傾向を強め、独占を生みだす。生産の諸条件、販売と支払いの諸条件を安定した、有利なものとするために、一握りの巨大な独占体は、いたるところで自由競争を排除しつつ、原材料資源の独占的確保、新技術、ノウ・ハウ等の独占、あれこれの技術労働力、熟練労働力の独占的確保、販売市場の独占

的確保、その他運輸・通信手段、支払・融資諸手段の自己に有利な確保等々をめぐって、一方では協定を結び、カルテル、トラスト、シンジケート、コンツェルンを形成し、他方では、相互に激しく競争し、争い、互いにほろぼしあいを展開する。こうした協定、分割、競争、激烈な戦闘は、諸々の巨大な独占体・独占資本家諸団体による世界の経済的分割と再分割とに（商品輸出と区別される資本輸出の意義がとくに重要なものとなる）、また同時に、帝国主義諸列強による地球の分割と再分割とに導く。

ところで、諸々の生産部面での生産と資本の集積・集中、独占への移行は、同時に、銀行が、社会のあらゆる部面から遊休貨幣資本をかきあつめ、銀行に特有の業務の拡大を通じて、この部門でも自由競争を排除し巨大な一握りの独占を生みだしつつ、単なる資本関係においても人的結合においてもますます産業資本と癒着していく過程であり、こうした産業資本と銀行資本との癒着によって生みだされた金融資本による社会の寡頭制支配の確立の過程である。

「分散した資本家たちから、一人の集团的資本家が生まれる。銀行は、若干の資本家のために当座勘定をひらいて、一見純粹に技術的な、もっぱら補助的な業務をおこなう。ところが、この業務が巨大な規模にまで成長すると、ひとにぎりの独占者が、全資本主義社会の商工業活動を自己に従属させるようになる。

彼らは——銀行取引関係、当座勘定、その他の金融業務をとおして、——まずはじめは、個々の資本家の営業状態を精密に知る可能性をえ、つぎには、信用を拡張するか縮小するか、またはそれを容易にするか困難にするかによって彼らを統制し、彼らに影響をあたえる可能性をえ、そして最後には、彼らの運命

(β) こうした金融寡頭制支配——独占による自由競争の排除は、では賃労働者階級にとつてはいかなるものとしてあり、いかなる意義をもつか。

第一に、労働力構成の、一企業内、あるいは一生産部面での賃労働者支配構成のヒエラルキー化が生じる。

熟練労働者が、従来一定程度保持してきた雇用、訓練、配置、労働条件等についての権限（産業資本主義段階の基幹産業たる綿工業の紡績熟練工をみよ）が資本の側に奪取され、いわゆる経営権の確立がはかられる。こうして中央集権的な管理体制が生みだされていく——労働者の資本による直接雇用制の定着、新しい中間管理職の発生と拡大、工程管理の発生、それに伴う技師層の発生、能率給やボーナス支給等の発生、かかる以上の体系による労働者の階層化、分断化、企業内化、さらに労働組合の承認から企業内組合化、抱き込み等々——。

なお、この頃より、産業部門、地域、規模に従って、あるいはそれらをこえて、資本家による経営者団体の組織化がひんばんになり、恒常化していく。

第二に、労働力の生産・再生産過程の資本の下への直接的な組織化が生じる。

従来資本は、労働力の生産・再生産過程を資本の蓄積過程——相対的過剰人口法則を通じて、いわば間接的に包摂してきただけであったが、この過程を直接に資本の下に組織化することになる。それは、二つの方面で、第一に、とくに重要なものは、国家諸機構・制度の拡大、それらの独占資本家諸団体の下への融合、癒着の一環・照応として（近代公学校校体制の形成、労働政策、社会政策の展開等）。

を完全に決定し、彼らの収益性を決定し、彼らから資本をひきあげたり、または彼らの資本を急速かつ大規模に増大させたりする可能性をえるのである。」（レーニン『帝国主義』岩波版P五八〜五九）

「生産の集積、そこから発生する独占、銀行と産業との融合あるいは癒着——これが金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である。」（同前P七八）

この金融寡頭制の支配は、一握りの巨大独占体による弱小資本にたいする、農民や独立小商品生産者たちにたいする支配と強制的関係を構造化する。いわゆる二重構造が生みだされる。さらに、それは、一国的にばかりではなく、商品と、とりわけ資本の輸出を通じて、国際的にも一国の枠をこえて、弱小諸民族のブルジョアジー、勤労大衆、プロレタリアートにたいする支配と強制的関係を構造化していく。

「われわれの目の前でおこなわれているのは、もはや、小企業と大企業との、技術的におくれた企業と技術的にすんだ企業との、競争戦ではない。われわれの目の前にあるものは、独占に、その圧迫に、その専横に服従しないものの独占者による絞殺である。」（同前P四四）

巨大な諸独占体相互の協定、結合（一時的な、あるいはある程度恒常的な）を伴った激烈な闘争、これら独占体による弱小諸資本、独立小商品生産者達への支配、強制関係、弱小諸資本や独立小商品生産者達相互の、独占体のおこぼれにあずかるための、より長く飼殺してされるための激烈な競争。

第二に、第一のことを前提とした労働力生産・再生産過程にかかる産業諸部門での独占の成立として。

第一の点は、国家の問題を扱う部分にまわして、ここでは第二の点について述べよう。マルクスは次のように言っている。

「資本家が自分の資本の一部分を労働力に転換するとき、彼はそれによって自分の総資本を増殖する。彼にとっては一挙兩得である。彼は、労働者から受取るものから利得するばかりでなく、労働者に与えるものからも利得する。労働力と交換して譲渡される資本は生活手段に転形されるのであって、この生活手段の消費は、現存労働者の筋肉・神経・骨・脳髓を再生産するため、および、新労働者を生みだすために役だつ。だから労働者階級の個人的消費は、絶対的必要の限界内では、資本によって労働力と引換えに譲渡された生活手段の、資本によって新たに搾取されうる労働力への再転形である。それは、資本家にとつて最も不可欠な生産手段たる労働者そのものの生産および再生産である。だから、労働者の個人的消費は、その行われるところが作業場・工場などの内部であるか外部であるか、労働過程の内部であるか外部であるかを問わず、資本の生産および再生産の一契機であつて、それはあたかも、機械の掃除が、労働過程の中で為されるかその一定の休止中に為されるかを問わず、そうした一契機であるのと全く同じである。労働者はその個人的消費を自分自身のために行うのであって資本家のために行うのではないということは、事態に何の係わりもない。たとえば、午馬が喰うものは彼等自身が享樂するのだとはいえ、彼等の消

費が生産過程の必要を一契機たるに交りはない。労働者階級の絶えざる維持および再生産は、資本の再生産のための恒常的条件である。資本家はこれらの条件の実現を、安心して、労働者の自己維持および生殖本能に委ねることができる。資本家が配慮するのは、労働者の個人的消費をできるかぎり必要の程度に制限することだけであらう。(マルクス『資本論』第一巻第二章P八九三〜八九四青木版)

「彼等の個人的消費でさえも、特定の限界内では、資本の再生産過程の一契機たるにすぎない。しかもこの過程は、これらの自己意識ある生産用具が逃走しないように、彼等の生産物をたえず彼等の極から資本の反対極に遠ざけることによって配慮する。個人的消費は、一方では、彼等自身の維持と再生産のために配慮し、他方では、生活手段の蕩尽によって労働市場における彼等のたえざる再出現のために配慮する。」(同前P八九六)

「概して云えば、労賃の一般的運動は、もっぱら、産業循環の週期的変動に照応する産業予備軍の膨張および収縮によって調整されている。だからそれは、労働者人口の絶対数の運動によって規定されているのではなく、労働者階級が現役軍と予備軍とに分裂する比率の変動によって、過剰人口の相対的大きさの増減によって、……規定されているのである。」(同前P八九七)

今日、この労働者階級の個人的消費の過程を、直接に、資本の運動、とくに諸独占体の運動がとらえ自己のもとにがっちり組織化

内に組織化するのに大きな役割を果たす——を通じて。そして言うまでもなく公然たる暴力装置の機能を通じて(原料資源、労働力、商品・資本市場確保のための帝国主義軍隊、公安、諜報機関の活動、チリにおける、CIAとITTとの関係については記憶に新しい)。こうして、金融資本グループに、ブルジョア政治家、高級官僚、高級軍人が様々の形で結びつき、金融寡頭支配諸グループが形成される。

「銀行と産業との『人的結合』は、これらの銀行や会社と政府との『人的結合』によって補足されている。」(レーニン『帝国主義』岩波版P六九〜七〇)

かかる諸独占体・独占資本家諸団体のもとへの国家諸機構・制度の融合・癒着は、一八〇〇年代末の世界資本主義一般の帝国主義段階への移行とともに(たとえば一八七九年ドイツ関税法成立の意義をみよ)、二〇世紀初頭の帝国主義段階への転化によって一応確立していく。だから、純経済学的な見地からすれば、いわゆる国家独占資本主義と呼ばれるものはすでに帝国主義に固有のものといえるのであり、独占が自由競争を排除しつつもそれと並んで存在し、それと特に激しいあつれき・矛盾を生み出す時代の資本の運動がとる一側面に他ならない。第二次大戦後の現代帝国主義—国家独占資本主義と呼ばれるものは、独占の領域の拡大、資本輸出の形態変化等に新しい現象があるとはいえず、純経済学的にはレーニン時代からの単なる延長にあるにすぎない。国家諸機関・制度の諸独占体—独占資本家諸団体のもとへの融合・癒着という面では、より一層強まり、深まっただけである。国家独占資本主義—現代帝国主義を独占資本主義—帝国主義からまた段階的に区別してとらえ

し、機構化している。いわゆる第三次産業の肥大化にそれははつきりとみてとれる。

かくて、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの支配は、プロレタリアートを一国的にとどまらない一つの強固なヒエラルキ—の内に統合し、階層化し、分断し、互いに衝突させ、その上層部分を超過利潤のおこぼれで系統的に買収し、特権化させ、自己の支配の手にし、等々として遂行される。だから、プロレタリアートにとっては、この帝国主義ブルジョアジーの支配は、より一層耐え難いものとなる。

(f) ところで、すでに述べてきたところからわかるように、独占の発展は、国家諸機構・制度を一握りの諸独占体が自己のもとに組みこみ、癒着せしめ、それを最大限に利用していくことを不可避とする。産業資本主義段階でのいわゆる夜警国家は姿を消し、政治—経済—社会のあらゆる領域への「国家」の「介入」が生じてくる。

さまざまな財政政策、金融政策の体系・制度——融資、支払、租税制度等における独占体への優遇策、公共・社会資本投資、直接的資金援助、国有化・公共企業体化の形での資本援助、等々——を通じて、大学や政府研究機関等による奉仕(技術上、イデオロギー的プロパガンダ上等)を通じて、資本輸出へのテコ入れ(公共借款等)を通じて、在外公館を通じての情報収集等を通じて、また、人口のますます圧倒的多数となっていく労働者階級を分断し、体制内化するためのあれこれの社会政策・労働政策の体系と制度、および近代公学校体制—教育政策体系・制度——これらはすでに述べた労働力生産・再生産過程での独占の成立を補完し、賃労働者階級を体制

ようと純経済学的にあれこれ試みることは不毛な作業でしかありえない。

では、国家独占資本主義と呼ばれるものは何か。

それにこたえるためには、純経済学的に規定しようという試みから自由にならねばならぬ。それはもつと政治的なものだ。国際階級闘争の発展の中に意義をもつものとしてつかまねばならない。それは、現代過渡期世界階級闘争における帝国主義世界支配体制の一つのあり方、国際的な結合への指向を強めるプロレタリアートを—国—国際的関係を貫いて国家間関係に分断・封じこめる支配体制に他ならぬ。

この点について、より詳しく述べるまえに、いわゆる現代帝国主義における新現象と呼ばれるものについて、すでにレーニンが、さかんに扱っていたかについてみておこう。

(a) 国家独占資本主義について

「世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、国家独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと」(『ロシア共産党(ボ)綱領草案』)

(b) はじめ二つの草案では「独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと」となっていたが、この最終草案では、このように「国家独占資本主義」が使われている。これは、そのまま、一九年綱領の成文として採用された。

「帝国主義戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化過程を極度に促進し、尖鋭化させた。全能の資本家団体とます

ます緊密に融合しつつある国家による勤労大衆の途方もない抑圧は、ますます途方もないものになりつつある。」(レーニン『国家と革命』「第一版序言」岩波版P一一)

「とくに帝国主義——銀行資本の時代、巨大な資本主義独占の時代、独占資本主義の国家独占資本主義への成長転化の時代——は、君主制の諸国でも、もともと自由な共和制の諸国でも、プロレタリアートにたいする弾圧の強化と関連して、『国家機構』の異常な強化を、その官僚的および軍事的装置の前代未聞の成長を、しめしている。」(同前本文P五〇)

「戦争は交戦諸国に前代未聞の惨禍をもたらしたが、同時にそれは、資本主義の発展を大いに促進して、独占資本主義を国家独占資本主義に転化させた。その結果、プロレタリアートも、革命的ブルジョア民主主義派も、資本主義の枠のなかにとどまっていられなくなつた。」(L全⑬『一九〇五—一九〇七年のロシア革命における社会民主党の農業綱領』「あとがき」P四四二)

「他方では、イギリスとフランスを主とするこのグループに對抗して、資本家のもう一つのグループ、いっそう略奪的で、いっそう強盗的なグループが進出してきた。これは、席がすつかりふさがつたあとで資本主義的獲物の食卓についた資本家たちだが、資本主義的生産の発展の新しいやり方、よりすぐれた技術を聞いてもちこみ、また、古い資本主義、自由競争の時代の資本主義を巨大なトラスト、シンジケート、カルテルの資本主義に転化させる比較にならない組織を聞いてもちこんだ資本家たちのグループである。このグループは、資本主義的生産の国

チェコ人)を誘発したりしている。このような事情のもとでは、

「『自国の』軍事作戦をそこなう危険をおかしたくないので、個々の弱小民族に、国家的独立をもふくめて、できるだけ多くの民主主義的自由をあたえることは、金融資本の見地からみて、『実現可能』なばかりでなく、さらにトラストにとって、またトラストの帝国主義的政策にとって、またトラストの帝国主義戦争にとつて、直接に有利なことさえしばしばある。」(L全⑭『マルクス主義の戯画と『帝国主義的経済主義』』とについて』P四七—四八)

(註) 傍線部分に特に注意せよ。

(c) 独占の拡大につれて——その一つの意義につれて

「さつさいの圧迫階級は、自己の支配を維持するために、二つの社会的機能、すなわち刑吏の機能と坊主の機能とを、必要とする。刑吏は、被圧迫者の抗議と騷擾をおしつぶさなければならぬ。坊主は、被圧迫者をなぐさめ、彼らに、階級支配が存続しても、苦しみや犠牲はかるくなるだろうという見とおしをあたえ(これは、このような見とおしが『実現する』かどうかを保証もしないでやるので、とくに好都合である……)、そうすることによって、彼らをこのような支配にあまんじさせ、革命的な行動をわすれさせ、彼らの革命的氣勢をそぎ、革命的決意をぶちこわさなければならぬ。」(レーニン『第二インタナショナルの崩壊』国民文庫版P六三)

「このような経済的基礎のうえに、いんぎんで、温順で、改良

家化の原理、すなわち、資本主義の巨大な力と国家の巨大な力とを単一の機構に——幾千万の人々を国家資本主義の単一の機構に組織する単一の機構に——結合するという原理をもたらした。」(L全⑭『戦争と革命』P四二九)

レーニンが念頭においているのは、明らかに、ドイツに典型的にあらわれた戦時国家独占資本主義——国家総動員・総力戦体制としてのそれである。とはいえそれは、他でもなく、資本主義の最高の発展段階にある帝国主義の、一つの極限、到達点をしめすものに他ならず、資本主義的帝国主義が不可避にそこへつきすすむ姿に他ならない。第一次大戦期のドイツや、第二次大戦期のナチス・ドイツ、日本と比較して、今日の「平時」の国家独占資本主義が、より「国家」を前面に出すことなく、ある種柔軟でありうるのは、独占の力がより広く、深く社会をとらえたことによるのである。この意味で今日の帝国主義における方がより一層、独占諸団体は国家諸機構・制度を深く呑みこんでいるのである。

(b) 新植民地主義について

「……一方ではこんにちの帝国主義戦争は政治的に独立した小国家を、金融上の結びつきと経済的利害との力によって、大國間の闘争にひきいれることに成功している実例(イギリスとポルトガル)をわれわれにしめしている。他方では、自分らの帝国主義的『庇護者』にたいしてはるかに無力な(経済的にも政治的にも)弱小民族にたいする民主主義的の侵害は、蜂起を誘発したり(アイルランド)、何個連隊もの敵方への寝がえり(

主義的で愛国主義的な職員や労働者のための経済的特権や施し物に対応する政治的特権や施し物を、最新の資本主義的政治的諸施設——新聞、議会、組合、会議、等々——が、つくりだしている。内閣または戦時工業委員会、議会や各種の委員会、『堅実な』合法新聞の編集局や、それにおとらず堅実で『ブルジョア的に従順な』労働者団体の指導部の収入の多い、安楽な地位——こういうものが、帝国主義ブルジョアジーが『ブルジョアの労働者党』の代表者や支持者を誘惑したり、報賞したりする手段である。政治的民主主義の機構も、これと同じ方向に作用している。今世紀では、なにごとくも選挙なしにはすまされない。大衆なしにやっていくことはできない。ところで、出版と議会制度との時代には、へつらいや、うそや、べてんや、俗うけのするはやり文句によるごまかしや、労働者になんでもすきな改良と福利をあたえようという——労働者がブルジョアジーの打倒のための革命的闘争を放棄しさえすれば——四方八方にふりまかれる約束の、多岐にわたる制度を系統的に実施し、しっかりと整備することなしには、大衆をついてこさせることはできない。」(L全⑭『帝国主義と社会主義の分裂』P一二五)

労働者階級にたいする超過利潤での系統的な買収、瞞着、分断等々に、独占のあらゆる分野への拡大——非物的生産部門にいたる——は、そしてさらに、諸独占体のもとへの国家諸機構・制度の融合・癒着は、いかに役立っていることであろうか! レーニンは、ここですでに構造改革派の破産を宣告している!

(d) ここで再び、国家独占資本主義——現代帝国主義にかんする論

争にかんがみて数言述べておこう。

△すでに述べたように、純経済学的見地から国家独占資本主義—現代帝国主義を一つの段階として規定しようとする試みは不毛である。こうした面では、かつては萌芽ではなかったが今やすっかり成熟している諸現象を内容上、一九年綱領にプラス・アルファすればよい(叙述の仕方は、構成について述べたように、プラス・アルファするわけではない、あくまで今日の帝国主義批判としてまとめる)。

国家独占資本主義—現代帝国主義批判を、現代過渡期世界階級闘争にたいする総括・態度として確定することである。プロレタリアート独裁ロシアの成立、コミンテルン創立、それをテコとしたプロレタリアートの国際的統合、コミンテルン解散以降は、中国共産党、ヴェトナム労働党、キューバ共産党—O.L.A.S.による、とりわけヴェトナム労働党によるプロレタリアートの国際的統合、—こうしたプロレタリアートの階級闘争を一国家、一地域毎に分断し、封じこめ、階級関係ではなくして一切を国家間関係に収約せんとする帝国主義の世界支配体制、これこそ国家独占資本主義—現代帝国主義と呼ばれるものの実態に他ならない。そしてこの支配・強制の体制の要であるのが帝国主義諸列強下プロレタリアートの封じこめ、先行的圧殺、分断体制である。「資本主義の巨大な力と国家の巨大な力とを単一の機構……に結合する」ことよってこそ、こうした支配体制は維持されているのである。

② スターリニストの全般的危機論では、今日の資本主義—帝国主義はもはや自律的な自己の運動を続けえず、国家の「介入」によってはじめてうまくやっていける、と主張されて

いる。これらの多くの論者では、政治と経済との関係についての混乱があり、経済的な意味での矛盾の激化、危機ということ、政治的な危機、体制危機ということが無自覚に混同されている。こうして万年危機論、自動崩壊論の誤謬が導かれる。だが、独占の発展、独占資本家諸団体のもとへの国家諸機構・制度の融合・癒着も、それは資本の運動の一つであって、そこに何かしらの資本主義の行きづまりを見ることは全く誤っている。

こうした論者には、階級関係の根本的批判を遂行しえないところからくる国家にたいする日和見主義がある。国家をどこまでも階級対立の非和解性の産物としてとらえず、階級関係から切断された外在的なものとして措定し、それが外部から、いわば中立を装って介入してくる、と考える。ここでは、国家は何がしか超階級的であるととらえられており、それが一方的にブルジョアに肩入れするものととらえられている。だから、国家への批判は、即自的な憤激の発露でしかなくなる。だが、国家は階級対立の非和解性の産物であり、他でなく支配階級の組織である。

「だれでも帝国主義のことを論じている。だが帝国主義とは、独占資本主義にはかならない。／ロシアでもやはり資本主義は独占資本主義になったということについては、『プロドゥーゴリ』『石炭シンジケート』『プロダメト』『冶金シンジケート』『砂糖シンジケート』その他が、これを十分あきらかに立証している。この同じ砂糖シンジケートは、独占資本主義が国家独占資本主義に成長転

化していることを、まざまざと認めしている。／ところで、国家とはなにか? それは、支配階級の組織であり、たとえば、ドイツではユンカーと資本家の組織である。したがってドイツのブレハノーフら(シャイデマン、レンシュその他)が『戦時社会主義』と名づけているものは、実際には、戦時国家独占資本主義であり、もつと簡単、明瞭に言えば、労働者にたいする軍事的苦役、資本家の利潤にたいする軍事的保護である。」(『全』『さしせまる破局、それとどうたかかうか』P三八四—三八五)

われわれが現代過渡期世界階級闘争上に確認しておくべきことは、こうした一切を基盤として可能にされているプロレタリアートにたいする帝国主義の戦術ともいえるべきものであり、その暴露が、だから問われているのである。

① レーニン帝国主義批判(一九年綱領当該部分)に付加すべきいくつかの点について

① 独占の拡大に伴う新たな産業予備軍の形成について

労働力の生産・再生産過程をも諸独占体がとらえたというところは、ここにおいてもいわれる二重構造が生みだされたことを意味する。膨大な弱小資本、独立小商品生産者達が新たに形成され、独占体のもとに構造化される(たえざる生成と没落・破滅)。しかも、多くの場合、こうした部面では、資本の有機的構成の高度化の面で困難があり、他の産業部面にもまして弱小資本や独立小商品生産者が形

成され、根強く残存する。ここに新たに膨大な相対的過剰人口が形成される。とくに、流動的、あるいは潜在的形態において、第三次産業の肥大化、そこへの就業人口の急膨張、不況時におけるこの失業人口の緩和等はこうしたことなのである。

② 資本輸出の形態変化について

本来、資本輸出には形態上、産業資本(機能資本)の輸出と、貸付資本の輸出とがある。前者は産業企業に投下され、それゆえ利潤をそこからひきだすのにたいして、後者は、国債、社債などへの投資等であり、それゆえ利子を受けとるものである。レーニンが『帝国主義論』で、イギリスを植民地的帝国主義と呼び、フランスを高利貸の帝国主義と呼んだのは、前者では、産業資本形態の輸出が主要であり、後者では、貸付資本形態の輸出が主要であったからである。

さらに、産業資本形態の輸出には、ごく一般的にいえば、証券投資と直接投資とが区別される。両者の分界線は明確ではないが、後者が対外企業の支配力をもつという点で重要である。

今日、付加すべき点は、対外企業の支配力を持ち、行使する直接投資が、公共借款等を補完利用しつつ、主要なものになったことである。それまでは、直接投資は、各帝国主義諸列強の自己のプロック内に、またとくに原料資源確保のための投資としてあったのであるが、とくに第二次大戦後、アメリカ帝国主義を中心として、対ヨーロッパ・カナダ・日本等にたいして、また、業種としても製造業にたいして大規模に遂行された。ごく最近では、いわゆる従属諸国

にたいしてさえ、この製造業にたいする直接投資が主要なものになつてきている。

さて、こうした形態変化は何を意味し、何をもたらしたか。投下された資本が単なる証券等の利子を目あてとするのでなく、利潤を目あてとし、あれこれの不変資本や商品形態の資本に固定されておき、その企業への支配力を保持し、行使するがゆえに、一言で言つて、絡みあい「が著しく強まった」といふことができる。

こうして世界市場は、ますます広さと深さを増し、かくして、諸資本・諸独占体・諸独占資本家団体の間の競争は激化し、経済的再分割戦は激化し、かくして帝国主義諸列強国家の間の競争が不可避に強まる（最近ではここに、きわめて規模が小さいとはいへいわゆる中進諸国が参入している）。

(3) いわゆる中進国—いわゆるサブ帝国主義について

中国共産党の三つの世界論の誤りは、彼らのいう第三世界諸国内の階級闘争の意義を過少評価していること、またそれゆえに、第三世界諸国の中で大きな分化がある点を過少評価している点にもっともよくあらわれている。この点はしばしば指摘されていることであり、アルバニア労働党などはこの点に批判の一つの焦点をあててい

る。確かにいわゆる中進国・サブ帝国主義諸国の問題で、中国共産党—三つの世界論は全く破綻しているが、しかし、アルバニア労働党のように単に分化を指摘し、これにプロレタリアートの階級闘争一般を対置するだけでは批判にはならない。今日の帝国主義諸列強の

がりの点で、いわゆる近代化の中核勢力であり、労働の社会化の程度をもっとも広範に、もっとも深く反映しているのである。それゆえ、帝国主義諸列強における独占資本家諸団体のもとへの国家諸機構・制度の融合・癒着、財・官・政・軍一体となつた寡頭支配諸グループの形成といふことがその形態という点からすれば一層際立って生じている。この点では、程度の差はあれ民族主義政権でも同一であるが、異なるのは、これらの諸国が帝国主義諸列強—国際独占体への従属化を深めることによつていわゆる「近代」化に成功し、このことによつて国内的にも対外的にも反共、強権的支配体制を敷くことを余儀なくされていることである。帝国主義諸列強に軍事基地を提供し、自ら周辺地域の警察官として軍事・治安活動拠点となつていふ—国境をこえた軍事介入、ヴェトナム革命戦争にたいする「韓」国、オースマン解放闘争にたいするシャール・イラン、アンゴラ、ジンバブエ、ナミビア解放闘争にたいする南ア共和国、パレスチナ解放闘争にたいするイスラエル、中南米諸国解放闘争にたいするブラジルなど、またとくに武装解放闘争にたいするものとして、イスラエル、南ア共和国、ブラジルの反革命としての軍事的役割は巨大である—。こうしたことは、これらの諸国誕生の歴史をみることではつきりする。これには、二つの流れがある。

まず、第一の流れについて。

中国革命、ヴェトナム革命、朝鮮革命、これらと結びついた一連の反帝民族解放闘争の発展は、一連の民族主義左派政権（××式社会主義を標榜）を登場させた。典型的なものは、スカルノのインドネシア、ネルーのインド、ナセルのエジプト、モサデグのイラン、ペロンのアルゼンチン等々である。

世界支配体制の中での、それらの諸国の意義、現代過渡期世界階級闘争での位置と役割とを暴露することが必要である。

資本主義の発展—全世界への浸透・拡大、とりわけ資本輸出の発展は、後進諸国の中で、資本制生産関係がその国の経済生活全体で直接的に決定的意義をもち、政治的には、帝国主義諸列強の手先・現場職制となるにいたつた一連の国々を現出させるにいたつた。「韓」国、ブラジル、南アフリカ共和国、「革命」前のイラン、シンガポール、イスラエル等々である。

これらの国々では、資本主義発展が、いかに帝国主義—国際独占資本家諸団体に深く従属し、種々の歪み・構造的脆弱性を伴つたものであれ、資本制生産がその国での経済生活全体で決定的な支配を獲得し、かくして労働の社会化の過程が厳然として進行し、(四)ある特定の産業部門では帝国主義諸列強—国際独占体の競争に介入するまでに到っている。プロレタリアート創出は、相当程度にすすんでおり、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争が、これらの国々の階級闘争全体の中で軸点となつてい

(四) 労働の社会化については、レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』国民文庫版第三分冊P一八九—一九九

ところで、これらの諸国での資本主義発展は、多くの場合、国家による強行的な、上からの資本主義化として組織されたものであり(国家資本主義的發展、しかし国際独占体—帝国主義諸列強に深くとらわれたそれ)、政権は、その発展を支える一つの大きな支柱たる軍部によつて、たいてい握られてい

る(軍隊—軍部は、後進諸国では兵器・軍事技術の關係で、軍事産業の關係で、そのすぐれた組織体制・生活の点で、国際独占体—帝国主義諸列強との様々なつながり、次々と、この「近代化」の担い手たる軍部による軍事独裁政権にとつてかわられていく。

これらの諸国では、一定の社会主義的理念を掲げ、軍部、エリート官僚、民族ブルジョアジー一体となつた国家資本主義的な、しかし帝国主義諸列強—国際独占体とは一線を画した工業化がすすめるが、経済的基盤の脆弱性、帝国主義諸列強—国際独占体による封鎖、しめつけ、浸透、土地革命の不徹底・放棄、そして何よりも革命の前衛党—プロレタリアートの党の不在・未成熟によつて行きつまずり、次々と、この「近代化」の担い手たる軍部による軍事独裁政権にとつてかわられていく。

こうして登場した軍部独裁政権は、帝国主義諸列強—国際独占体との結びつきを強め、それらへの従属を深めつつ上からの強行的資本主義化を遂行し、一定の原蓄を遂行し、農民層の分解、プロレタリアートの創出をなしとげた。資本の再生産軌道は深く帝国主義にくみこまれつつ、いわゆる近代化には成功したといつてよい。こうして、かつての民族ブルジョアジー、一定の反帝の性格を保持しえていたそれは姿を消し、軍部—特権的ブルジョアジー、特権的官僚・軍人の一体化した寡頭支配グループが形成され、プロレタリアートの階級闘争が前面に出てきた。

国内の資本主義の基盤が脆弱でありながら一部の特定部門では巨大な資本規模をもち、また全体として深く世界資本主義にからめとられ、帝国主義諸列強—国際独占体に従属していることに、また、出生が多くの場合あれこれの××式社会主義—民族主義左派政権を打倒することによるものであることによつて、反共産主義的反動的性格を強くもつてい

次いで第二の流れについて。

ここには、「韓」国、イスラエル、ある程度だが革命以前のサイ

ゴン政権が入る。

△プロレタリアート独裁ロシア樹立、コミンテルン創立—現代過渡期世界成立は、帝国主義諸列強をして、その世界支配体制維持・強化のために、プロレタリアートの国際的結合への志向を粉碎し、一国毎、地域毎に分断・封じ込めることを何よりも重要な課題とせしめたが、第一次大戦後のポーランド、ハンガリー、ブルガリア、そしてファシスト・イタリア、ナチス・ドイツ、フランコ・スペインなど、また、第二次大戦後では、いわゆる分断国家「韓」国、サイゴン政権、西ドイツ、そしてイスラエルが反共突撃国家としてその任務を担うこととなった。

△帝国主義列強の一員でもあるドイツは別として、かつてのハンガリーやポーランド、今日の「韓」国、イスラエルなどは、世界的なプロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立の非和解性が生み出した反共突撃国家として、帝国主義諸列強の強力な経済的あるいは政治的あるいは軍事的なテコ入れを受け、先にみた流れにある民族主義左派政権へのアンチ・モデルとして育成され、だが同じく、上からの、強行的な形でかなりの程度に資本主義化がなされてきたのである。

ところで、こうした事態を帝国主義諸列強の側からみれば、現代過渡期世界出現以降、帝国主義世界支配体制に不可欠なプロレタリアートの国際的結合志向の粉碎、一国一地域の分断・封じ込め、の一環である。とりわけ、第二次大戦後、反帝民族解放闘争の高揚—旧来の植民地の政治的独立にたいし、政治的独立を認めつつ支配体制を維持せんとする新植民地主義の展開に、これらの国々はなくてはならない存在である。一連の民族主義左派政権の打倒—軍事独

陥をより鮮明にしておこう。彼らは、中国派が急速に右旋回する中で、なお、反帝国主義の左派に位置しているからである。

アミンの「中心部資本主義構成体—周辺部資本主義構成体」にせよ、フランクの「大都市—衛星」構造にせよ、そこでは今日の世界は、あくまで世界支配体制としてとらえられている。アミン、フランクらは世界を各別別の「パナマ」の国民経済分析に分解してしまふことに反対する。この観点は、スターリン、ブハーリンの総和革命論に典型的なあれこれの先進国中心主義—一国主義にたいする批判としては意義あるものである。それは、次の諸点である。①、ソ連派の二段階革命戦略論—民族ブルジョアジーへの過大評価にたいする批判、②、いわゆる第三世界諸国内階級闘争の重要性を押しだしたこの闘争こそが反帝闘争を拡大、深化させるものであることの強調、③、いわゆる第三世界諸国があくまで帝国主義の世界支配体制のもとにガッチリ組みこまれてることを強調し、帝国主義諸列強を打倒することなしに解放はありえないことを言明していること、④、それゆえ、一国的な、左翼的ポーズをとった民族主義政権や種々の色合いのナントカ式社会主義の欺瞞性を批判していること、⑤、労働者国家も結局、帝国主義世界支配体制の中にくみこまれてることを明らかにしていること。

こうした彼らの論点は、帝国主義にたいする歴大な具体的事実による暴露とともに、われわれの位置からする克服を要する重要な問題である。この作業にも、われわれがすでに前半部解説で明らかにした「賃労働—資本」関係の根本的批判が生きてくるのである。実際、彼らはこの面で、スターリン的な搾取のしくみ論から脱けて、おろらず、マルクス経済学批判をそのようなものとしてとらえたり

裁政権の登場に、アメリカが帝国主義をはじめとする帝国主義諸列強の暗躍があることは誰の眼にも明らかである。

だが、すでに述べたように、中進国—サブ帝国主義とよばれる一連の国々が登場したことは、プロレタリアートの国際的結合、世界同時革命、プロレタリア共産主義革命の前進に、ますます大きな根拠を提供している。何よりも、コミンテルンの負の遺産を克服し、新たなインタナショナル創建の課題を鋭くつきつけている。イランの革命、「韓」国光州蜂起は、従来の反帝民族解放闘争の地平を大きく一歩すすめたのであり、そのことによって、より一層われわれ共産主義者に、かの課題をつきつけたのである。

(Ⅳ) 現代帝国主義論—第三世界論について

第三世界論については、前半部解説において、もともと根本的な点について評価を下してある。また、前項(Ⅰ)においても、後半部の方法上の難点について指摘した。本項では、前者についてみてみる。それは、一言でいえば、△今日、商品生産は全世界を覆い、資本主義的生産関係が決定的な支配を獲得している」という点を曖昧にし、帝国主義批判をそのいわば下部構造たる古い資本主義にたいする批判に深めえず、かくして、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級矛盾をとらえきれず、人民、第三世界人民等対帝国主義という矛盾を基底にした闘いを考え、かくしてプロレタリア階級闘争を反帝闘争に切りかちめていくという点である。

ここでは帝国主義批判の観点から、この第三世界論をとりあげ、われわれの草案の意義を述べ、すでに明らかにした彼らの主張の欠

えて、批判をしようとして、マルクスから離れ、現実から離れ、プロレタリアートから眼をそらして第三世界人民等々に思いついているのである。こうした方法を純化すれば、社会学的な階級・階層分析に埋没するか、あるいは人民、民族等の一般的規定の怒号の中に昇天するか、しかないのではないか。

アミンはいう。

「この体制の増大する基本的矛盾は、実際利潤率の傾向的低下によって表現される。世界的規模においてこれに対抗する方法がただ一つだけある。すなわち、剰余価値率を引き上げることである。ところで周辺部においては、その構成体の本質によって、中心部の剰余価値率よりも大幅に引き上げることができる。その結果相対的の意味では、周辺部のプロレタリアートの方が中心部のプロレタリアートよりも、増大する搾取に耐えることが可能である」(『世界資本蓄積論』P四六)

このアミンの言明は、この部分直前の、「プロレタリアートの中核が、以後(御ロシア革命以後のこと—引用者)はもはや中心部にはなく、周辺部に存在すること……なぜこうした移行がおこったのだらうか」(同前)

という問いにたいしてなされているのである。アミンのこの言明は、一から十まで誤りに満ちているといつてよいが、整理すれば次のようになる。①利潤率の傾向的低下の法則を、傾向的という点を曖昧にし、絶対化する傾向にあること、②この上でそれを資本主義体制の基本矛盾にしていること、③この基本矛盾を緩和するものとして、搾取に直接につながっている剰余価値率の増大だけをとりあげていること(マルクスは、利潤率の傾向的低下法則に反対に作用す

<p>世界資本主義は、こんにち——およそ二十世紀の初頭に——帝国主義の段階に到達した。帝国主義は、または金融資本の時代は、独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラスト——が決定的な意義を獲得し、途方もなく集積された銀行資本が産業資本と融合し、外国への資本輸出がきわめて大規模に発展し、全世界がもっとも富裕な諸国のあいだにすでに地域的に分割されつくし、国際トラストによる世界の経済的分割がはじまった、そういう非常に高度に発展した資本主義経済である。</p>	<p>綱領改訂草案（一九一七・六）</p>
<p>世界資本主義は、こんにち——およそ二十世紀の初頭に——帝国主義の段階に到達した。帝国主義は、または金融資本の時代は、独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラスト——が決定的な意義をもつようになり、途方もなく集積された銀行資本が産業資本と融合し、外国への資本輸出がきわめて大規模に発展し、全世界がもっとも富裕な諸国のあいだにすでに地域的に分割されつくし、国際トラストによる世界の経済的分割がはじまった、そういう非常に高度に発展した資本主義経済で</p>	<p>綱領草案下書き（一九一九・二）</p>
<p>資本の集積と集中の過程は、自由競争を排除しつつ、二十世紀の初頭に、経済生活全体で決定的な意義をもつようになった強大な独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラスト——を成立させ、銀行資本と途方もなく集積された産業資本とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させ、もっとも富裕な諸国のあいだに、資本主義列強のますます広範なグループを包括するトラストのあいだに、すでに地域的に分割された地球の経済的分割を開始させるにいたった。これは、金融資本の時代、資</p>	<p>綱領草案（一九一九・二）</p>
<p>資本の集積と集中の過程は、自由競争を排除することによって、二十世紀の初頭に、経済生活全体で決定的な意義をもつようになった強大な独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラスト——を成立させ、銀行資本と途方もなく集積された産業資本とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させ、資本主義列強の幾多のグループを包括するトラストは、すでに地域的に分割された地球の経済的分割を開始した。これは、資本主義諸国家のあいだの競争を不可避的に激化させる金融資本の時代、</p>	<p>綱領（一九一九・三）</p>

II 資料

(i) レーニン——ロシア共産党の綱領草案・綱領

る諸要因として(一)労働の搾取度の増強、(二)労働力の価値以下への賃金の引下げ、(三)不変資本の諸要素の低廉化、(四)相対的過剰人口、(五)貿易、(六)株式資本の増加をあげている。アミンの議論では、(三)は(六)は完全に脱落しているのではなからうか。(四)かくして、搾取度(=剰余価値率)は中心部より周辺部において高くなると論証抜きに断定していること(マルクス自身が言っているように、搾取率を高める方法は同時に利潤率を下げる働きをする以上、搾取率増大ということとは「中心部より周辺部で」という命題を証明する具となりえないのである)、⑤かくて、プロレタリアートの中核は周辺部にあると主張していること。

以上、明らかのように、アミンのこの言明では徹頭徹尾、搾取のしくみ論からへ賃労働—資本—関係をみ、資本主義を批判している。結局アミンは、プロレタリアートとブルジョアジーの階級関係を、搾取関係としてみ、この点での量的差異から、プロレタリアートのプロレタリアートとしての所以を云々しているのであり、この面では、ズブズの組合主義(経済主義)に密通せざるをえない。

こうして、アミンにとってプロレタリアートであるということとは、より搾取されているものという以上ではないことになる。

「周辺部ブルジョアジーと同じく、周辺部プロレタリアートも種々の形態をとる。それは単に、または主として、近代的大企業の賃金労働者からなるのではない。世界的な交換に組みこまれる不等価交換という代償を都市プロレタリアートと同じように払っている多くの農民もまた、この一部を構成しているのである。……結局のところ彼らは、世界市場に統合されることに

よってプロレタリア化されている。」(同前)

スターリニズム経済学が、搾取のしくみ論からプロレタリアートをいわゆる物的生産にかかわる生産的労働者—近代的大工業に動く賃労働者の階級であるとするのにたいし、アミンは、搾取のしくみ論は批判せず、それのつかかって、生産的労働者—賃労働者階級の拡大を主張しているのである。

一方、フランクは、いわゆる第三世界での反帝闘争において、それらの諸国内階級闘争が重大な意義をもっているというのであるが、この場合の階級闘争という場合、スターリン、トロツキー、毛沢東らの階級分析から自由でなく、工業プロレタリアート、「浮遊人口」、小ブルジョア層、農業プロレタリアート等をあれこれ、非政治的に(つまり、党形成と切断された階級形成として)いじくりまわしているのである。

(註) 本稿執筆後、革命の旗派と紅旗派は野合し、赫旗派となった。綱領は紅旗のものがベースとなって採択されている。これも資料としてIに追録した。

帝国主義戦争—内乱	階級矛盾の激化— プロレタリア革命の物的根拠の成熟	階級矛盾の激化— プロレタリア革命の物的根拠の成熟	帝国主義戦争
	<p>政治闘争に巨大な障害があること、帝国主義が惨禍や、災厄や、零落や、野蛮化を生みだしていること、——すべてこれらのことからして、資本主義がこんにち到達している発展段階はプロレタリア社会主義革命の時代となっている。</p> <p>この時代ははじまった。</p>	<p>世界資本主義一般がきわめて高い発展段階に達していること、独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと、銀行ならびに資本家団体によって、物資の生産と分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と、労働者階級にたいするシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級の経済闘争と</p>	<p>こういふ事態のもとでは、帝国主義戦争、すなわち、世界支配をめぐる、銀行資本のための市場の獲得をめぐる、また弱小民族の圧殺をめぐる戦争は、避けられない。そして、一九一四—一九一七年の最初の帝国主義大戦争こそ、まさにそういう戦争である。</p>
	<p>政治闘争に巨大な障害があること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落や野蛮化を生みだしていること、——すべてこれらのことからして、資本主義がこんにち到達している発展段階はプロレタリア社会主義革命の時代となっている。</p> <p>この時代ははじまった。</p>	<p>世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと、銀行ならびに資本家団体によって、物資の生産と分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と、労働者階級にたいするシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級の経済闘争と</p>	<p>ある。</p> <p>こういふ事態のもとでは、帝国主義戦争——すなわち、世界支配をめぐる、銀行資本のための市場の獲得をめぐる、また弱小民族の圧殺をめぐる戦争——は、避けられない。そして、一九一四—一九一八年の最初の帝国主義大戦争こそ、まさにそういう戦争である。</p>
	<p>国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争に巨大な障害があること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落を生みだしていること、——すべてこれらのことからして、資本主義がこんにち到達している発展段階はプロレタリア共産主義革命の時代となっている。</p> <p>この時代ははじまった。</p>	<p>世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、国家独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと、銀行ならびに資本家団体によって、物資の生産と分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と、労働者階級にたいするシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義</p>	<p>本主義諸国家のあいだでのかつて見られなかつたほど激烈な闘争の時代、帝国主義の時代である。</p> <p>ここからして、帝国主義戦争が、すなわち販売市場、資本の投下地域、原料と安価な労働力のための、つまり世界支配のため、弱小民族を圧殺するための戦争が、不可避免的に生じる。一九一四—一九一八年の最初の帝国主義大戦争こそ、まさにそういう戦争である。</p>
<p>帝国主義戦争は、公正な講和でおわることができなかつたばかりでなく、総じてブルジョア諸政府のあいだにいくぶんでも安定した講和が締結されることで、おわることもできなかつた。こんにち資本主義が到達している発展段階にあっては、帝国主義戦争は、われわれの目のまえで不可避免的に、プロレタリアートを先頭とする被搾取労働大衆の、ブルジョアジーにたいする内乱に転化したし、また転化しつつある。</p>	<p>国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争に巨大な障害に面していること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落を生みだしていること、——すべてこれらのことは、資本主義の破綻と、より高度の型の社会経済への移行とを、避けられないものにした。</p>	<p>世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、国家独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと、銀行ならびに資本家団体によって、物資の生産と分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と、労働者階級にたいするシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義</p>	<p>ここからして帝国主義戦争が、すなわち販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり世界支配のため、弱小民族にたいする支配権のための戦争が、不可避免的に生じる。一九一四—一九一八年の最初の帝国主義大戦争こそ、まさにそういう戦争である。</p> <p>帝国主義の時代である。</p>

プロレタリア共産主義革命	戦術	戦術	三ブロック階級闘争の結合	国際反革命同盟
<p>この任務を遂行するためには、</p>	<p>帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、プロレタリア社会主義革命だけである。革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがであろうと、また反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの終局の勝利は避けられない。</p> <p>だから、現代の日程には、社会主義革命の内容をなす経済的方策と政治的方策を表現するために政治権力を獲得する準備を、プロレタリアートに全面的に、直接とのえさせるといふ任務が、客観的条件によつてのぼされている。</p>			
<p>プロレタリア革命の勝利のため</p>	<p>帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、プロレタリア社会主義革命だけである。革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがであろうと、また反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの終局の勝利は避けられない。</p>			
<p>世界プロレタリア革命の勝利の</p>	<p>帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、プロレタリア共産主義革命だけである。革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがであろうと、また反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利は避けられない。</p>			
<p>世界プロレタリア革命のこの勝</p>	<p>帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、プロレタリア共産主義革命だけである。革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがであろうと、また反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利は避けられない。</p>	<p>なユートピアであるばかりか、勤労者を露骨に欺瞞するものであり、プロレタリアートを武装解除し、搾取者の武装解除という任務からプロレタリアートをそらせることを目的とするものである。</p>	<p>こういふ事情のもとでは、平和主義のスローガン、資本主義のもとでの国際的軍備縮小、仲裁裁判所、などのスローガンは、反動的</p>	<p>プロレタリアートの攻撃が増大し、とくに個々の国々でプロレタリアートが勝利したことは、搾取者の反抗をつよめている。その結果、搾取者がかわでも、資本家の国際的統合の新しい諸形態（国際連盟、その他）をつくりだすにいたっている。資本家は、地上のすべての国の人民の系統的な搾取を世界的な規模で組織するとともに、すべての国のプロレタリアートの革命運動を直接に鎮圧することにその当面の努力をそそいでいる。</p> <p>すべてのこのうしたこのため、個々の国家内の内乱と、自己を防御するプロレタリア諸国および被抑圧諸国民の帝国主義列強にたいする革命戦争とが結びつくことは、避けられない。</p>

すべての先進国の労働者階級のあいだの完全な信頼と、もつとも緊密な兄弟的同盟と、革命的行動の直接の統一とが必要であつて、公認の社会民主諸党の圧倒的多数の上層で勝利をえた、社会主義のあのブルジョア的歪曲と、ただちに、原則的に手を切らないかぎり、この任務を実現することはできない。

には、すべての先進国の労働者階級のあいだの完全な信頼と、もつとも緊密な兄弟的同盟と、彼らの革命的行動のできるだけ大きな統一とが必要である。これらの条件は、公認の「社会民主」党や「社会」党の圧倒的多数の上層で勝利をえた、社会主義のあのブルジョア的歪曲と、断固として原則的に手を切り、それと仮借なくたたかわないかぎり、実現することはできない。

ためには、先進諸国の労働者階級のあいだの完全な信頼と、もつとも緊密な兄弟的同盟と、彼らの革命行動のできるだけ大きな統一とが必要である。これらの条件は、公認の「社会民主」党や「社会」党の上層で勝利をえた、社会主義のあのブルジョア的歪曲と、断固として原則的に手を切り、それと仮借なくたたかわないかぎり、実現することはできない。

利のためには、先進諸国における労働者階級のあいだの完全な信頼と、もつとも緊密な兄弟的同盟と、彼らの革命的行動のできるだけ大きな統一とが必要である。これらの条件は、公認の社会民主党や社会党の上層で勝利を得た、社会主義のあのブルジョア的歪曲と、原則的に、断固として手を切り、それと仮借なくたたかわないかぎり、実現することはできない。

そういう歪曲の一つは、社会排外主義の潮流である。これは、口さきでの社会主義、実際の排外主義であつて、「自」国ブルジョアジの略奪者の利益を「祖国擁護」のスローガンでおおいかくすものである。

そういう歪曲の一つは、日和見主義と社会排外主義の潮流である。これは、口さきでの社会主義、実際の排外主義であつて、総じて、「自」国ブルジョアジの略奪者の利益の擁護を「祖国擁護」のスローガンでおおいかくすものであり、とくに一九一四—一九一八年の帝国主義戦争のときにはそうであつた。こういう潮流が生まれたのは、ほとんどすべての先進国が、植民地民族や弱小民族を略奪する

そういう歪曲の一つは、日和見主義と社会排外主義の潮流である。これは、口さきでの社会主義、実際の排外主義であつて、総じて「自」国ブルジョアジの略奪者の利益の擁護を「祖国擁護」といういつわりのスローガンでおおいかくすものであり、とくに一九一四—一九一八年の帝国主義戦争のときにはそうであつた。こういう潮流が生みだされたのは、先進資本主義諸国家が、植民地民族や弱小

そういう歪曲の一つは、日和見主義と社会排外主義の潮流である。これは、口さきでの社会主義、実際の排外主義であつて、総じて自国ブルジョアジの略奪者の利益の擁護を祖国擁護といいつわりのスローガンでおおいかくすものであり、とくに一九一四—一九一八年の帝国主義戦争のときにそのようにふるまつた。こういう潮流を生みだしたのは、先進資本主義諸国家が、植民地民族や弱小民族

ことによつて、ブルジョアジに、あの超過利潤の一小部分でプロレタリアートの上層を買収し、平時には彼らに相当の小市民的生活を保障し、この層の指導者を自分に奉仕させる可能性をあたえたことによるものである。ブルジョアジの召使である日和見主義者と社会排外主義者は、プロレタリアートの直接の階級敵である。

民族を略奪することによつて、ブルジョアジに、この略奪によつて獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリアートの上層を買収し、平時には彼らに相当の小市民的生活を保障し、この層の指導者を自分に奉仕させる可能性をあたえることによるものである。ブルジョアジの召使である日和見主義者と社会排外主義者は、プロレタリアートの直接の階級敵である。とくに現在、彼らが資本家とむすんで、自国ならびに外国における革命運動を武力で弾圧しているときには、なおさらそうである。

を略奪することによつて、ブルジョアジに、この略奪によつて獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリアートの上層に特権的な地位をあたえ、それによつて彼らを買収し、平時には相当の小市民的生活をこの上層に保障し、この層の指導者を自分の召使とする可能性をあたえているという事情である。ブルジョアジの召使である日和見主義者と社会排外主義者は、プロレタリアートの直接の階級敵である。とくに現在、彼らが資本家と手をむすんで自国や外国の革命運動を武力で弾圧しているときには、なおさらそうである。

他方、前者におとらないほど広範で国際的な、いわゆる「中央派」の潮流がある。これは、社会排外主義者との統一を主張し、破産した第二インタナショナルを保存または改良することを主張して、社会排外主義と、社会主義体制の實現をめざすプロレタリアートの革

社会排外主義のブルジョア的歪曲の他の一つは、前者におとらないほど広範で国際的な「中央派」の潮流であつた。これは、社会排外主義者と共産主義者とのあいだを動揺して、前者との統一を主張し、また、破産し腐りはた第二インタナショナルを復活させよう

社会主義のブルジョア的歪曲の他の一つは、同様にすべての国に見られる「中央派」の潮流であつた。これは、社会排外主義者と共産主義者とのあいだを動揺して、前者との統一を主張し、また破産した第二インタナショナルを復活させようと試みている。

社会主義のブルジョア的歪曲の他の一つは、同様にすべての国にみられる「中央派」の潮流である。これは、社会排外主義者と共産主義者とのあいだを動揺して、前者との統一を主張し、また破産した第二インタナショナルを復活させようと試みているのである。

命的の国際主義的闘争とのあいだを動揺している潮流である。

と試みている。

真にプロレタリア的で革命的なのは、新しい第三共産主義インタナショナルである。これは事実上は、幾多の国で、とくにドイツで、以前の社会党から共産党が形成されたことによって創立されたものであって、万国のプロレタリアートの大衆のあいだでますます大きな共感を獲得しつつある。

自己の解放をめざすプロレタリアートの闘争の指導者は、新しい、第三共産主義インタナショナルだけである。これは事実上は、幾多の国で、とくにドイツで、以前の社会党内の真にプロレタリア的な分子から共産党が形成されたことによって創立されたものであって、万国のプロレタリアートの大衆のあいだでますます大きな共感を獲得しつつある。このインタナショナルは、その名称においてマルクス主義に帰るだけではなく、その思想的、政治的内容全体によっても、その行動全体によっても、ブルジョアの日和見主義的歪曲からきよめられたマルクスの革命的学説を実現するものである。

自己の解放をめざすプロレタリアートの闘争の指導者は、新しい、第三共産主義インタナショナルだけであって、ロシア共産党はこのインタナショナルの一部隊である。このインタナショナルは、幾多の国で、とくにドイツで、以前の社会党内に真にプロレタリア的な分子から共産党が形成されたことによって、事実上創設されたが、正式には、一九一九年三月にモスクワでひらかれたその第一回大会で創立された。共産主義インタナショナルは、万国のプロレタリアートの大衆のあいだでますます大きな共感を獲得しつつあるが、これは、その名称においてマルクス主義に帰るだけではなく、その思想的、政治的内容全体によっても、またその行動全体によっても、ブルジョアの日和見主義的歪曲からきよめられたマルクスの革命的

学説を実現するものである。

「綱領改訂草案」(一九一七年六月)『党綱領改正資料』、国民文庫版『党綱領問題』ⅡP四四三〜四四五、L全②P四九六〜四九八より抜粋

「ロシア共産党綱領草案下書き」(一九一九年二月二五日)『ブラウダ』第四三三号、国民文庫版『党綱領問題』ⅠP五六一〜五六四、L全②P八八〜九〇より抜粋

「ロシア共産党(ボ)綱領草案」(一九一九年二月二五日)『ブラウダ』第四三三号、国民文庫版『党綱領問題』ⅠP五八四〜五八六、L全②P一〇八〜一一〇より抜粋

「ロシア共産党(ボ)綱領」(一九一九年三月第八回大会採択、国民文庫版『党綱領問題』ⅠP六八九〜六九二)より抜粋

(ii) 共産主義者同盟革命の旗派の「綱領草案」

第二章 帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代

- (13) 資本主義は帝国主義に移りし、世界プロレタリア共産主義革命の開始に導いた。そうした時代の特徴をロシア共産党の綱領は次のように正しく特徴づけた。
- (14) 「資本の集積と集中の過程は、自由競争を排除することによって、二十世紀の初頭に、経済生活全体で決定的な意義をもつようになった強大な独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラストを成立させ、銀行資本と途方もなく集積された産業資本家とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させた。資本主義列強の幾多のグループを包括するトラストはすでに地域的に分割ずみの地球の経済的分割を開始した。これは資本主義諸国家のあいだの闘争を不可避的に激化させる金融資本の時代、帝国主義の時代である。
- (15) ここからして帝国主義戦争が、すなわち販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり、世界支配のため、弱少民族にたいする支配のための戦争が不可避的に生じる。一九一四〜一九一八年の最初の帝国主義大戦争こそまさにそういう戦争である。
- (16) 世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、国家独占資本主義が自由競争にとって代ったこと、銀行ならびに資本家団体によって物質の生産と分配の過程にたいする社会的

規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と労働者階級にたいするシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争が巨大な障害に直面していること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落を生みだしていること、——すべてこれらのことは資本主義の破綻とより高度の型の社会経済への移行とを避けられないものにした。

(17) 帝国主義戦争は公正な講和で終ることができなかつたばかりではなく、総じてブルジョア諸政府のあいだにいくぶんでも安定した講和が締結されたことで終わることもできなかつた。今日資本主義が到達している発展段階にあつては、帝国主義戦争は、我々の眼の前で不可避にプロレタリアートを先頭とする被搾取労働大衆のブルジョア階級にたいする内乱に転化した。

(18) ロシアの十月革命は、プロレタリア階級独裁を樹立し、最初の社会主義革命を実現した。プロレタリア階級は、貧農すなわち半プロレタリアの支持をうけて共産主義社会の基礎を創出し始めた。それを根拠地として全世界における帝国主義と搾取者に対するプロレタリア階級、勤労人民の反抗はいちじるしく強まり、プロレタリア階級の国際的結束が飛躍的に強化された。さらに植民地・従属諸国においては、プロレタリア階級・農民を中心とした帝国主義にたいする闘争もまた大きく発展し、国際共産党と国際プロレタリア階級の革命運動と緊密に結びつくことによつて、世界プロレタリア共産主義革命の一環に転化した。これらの諸国の多くに共産党が誕生し、民族解放闘争を指導することによつて、その勝利をひきつづき社会主義革命に向けて発展させる可能性が生み出された。かくてプロレタリア階級の闘争は、被抑圧民族と結合し、文字通り世界的なものとなつた。

(19) こうして帝国主義から社会主義への世界的過渡期に入った。この過渡期世界には帝国主義国相互間の矛盾、帝国主義国におけるブルジョア階級とプロレタリア階級の矛盾、帝国主義国と被抑圧民族の矛盾、社会主義国と帝国主義国との矛盾という四つの基本矛盾が存在する。世界プロレタリア共産主義革命は、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会革命を継続する社会主義国の革命、民族解放・民主主義革命から社会主義革命へ進む植民地・従属諸国の革命、帝国主義国の社会主義革命という三プロック革命の結合である。

(20) この三プロック革命の前進に対抗し、帝国主義諸列強は、二度にわたる世界大戦を経て、米帝国主義が二流帝国主義を従属させ、国際支配体制を確立した。こうした中で、最初の社会主義国ソ連は、現代修正主義が党と国家を支配し、国内的にはプロレタリア階級独裁と継続革命を放棄し、官僚ブルジョア階級独裁のもとで資本主義が全面化し、対外的には他民族を抑圧し、世界再分割戦に参加することで社会帝国主義へ転落した。同様に東欧諸国も官僚ブルジョア階級が支配する国家資本主義になり、かつソ連社会帝国主義の従属国となつた。こうして一時期存在した社会主義陣営は、崩壊した。これに対し中国を先頭とするアジアの社会主義国は、プロレタリア階級独裁を堅持し、社会主義継続革命によつて社会主義建設を推し進めた。民族解放・人民民主主義革命から社会主義革命へ推し進めて勝利した中国革命を模範とする民族解放闘争が、アジアの社会主義国と結合し、前進し、世界革命の主力軍となつている。こうして現代世界の基本矛盾が一層深まり、激化している。

(21) 今日、新たな戦争と革命の時代が始まりつつある。社会主義国である中国、朝鮮民主主義人民共和国等が大後方となり、一九七五年のベトナム・ラオス・カンボジアの抗米救国闘争の勝利をはじめ、民族解放闘争がアジア、アフリカ、ラテンアメリカ全域に拡大し、米帝国主義を先頭とした帝国主義の植民地支配体制を危機におとしれつつある。米帝国主義は、いまだ最大の帝国主義として、崩壊しつつある覇権の維持、再編に向い、これに従属的に同盟しつつ、その枠内で勢力圏再分割を目指す西独、日本帝国主義が登場している。またソ連社会帝国主義は、「社会主義大家族論」「民族解放闘争支持」を掲げ、実際では東欧を一層従属国化し、社会主義国への干渉を強め、民族解放闘争を抑圧、隷属、変質させ、米帝国主義にとつてかわつて新たな世界支配体制を確立しようとして登場し、両者の間で覇権争奪戦、第三次世界再分割戦が始まり、激化している。そして二流の帝国主義国である西欧、日本では、資本主義の高度成長が破綻し、プロレタリア階級、勤労人民の反抗が増大し、ブルジョア階級独裁が危機に陥りつつある。これに加えて、アジアの社会主義国を大後方とする民族解放闘争の前進によつて帝国主義的権益をおびやかされ、また、ソ・米二超大国の帝国主義が世界再分割戦を強めていることから、一層体制的危機を深め、階級闘争を激化させ、社会主義革命に向けた革命情勢が端的に始まりつつある。

(22) すべてこうしたことから、ソ・米を策源地とする第三次帝国主義世界大戦の危険性が増大している。と同時に、社会主義国を大後方とする民族解放闘争が拡大し、社会主義国の祖国防衛戦争と、二流の帝国主義国での社会主義革命戦争が結びつくことは不可避である。

(23) こうした事情の下では、議会を通じた平和革命、帝国主義国と社会帝国主義国の国際的緊張緩和(デタント)や、国際的軍備縮少(SALT)などのスローガンは反動的ユートピアであるばかりか、勤労人民を露骨に欺瞞するものであり、プロレタリア階級を武装解除し、搾取者の武装

解除という任務からプロレタリア階級をそらせることを目的とするものである。帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、世界プロレタリア共産主義革命だけである。革命が一時失敗することがあろうと、反革命の波がどんなであらうと、プロレタリア階級の最後の勝利は避けられない。

(24) 世界プロレタリア共産主義革命の勝利を目指す闘いにおいて、社会主義国、帝国主義国、被抑圧国におけるプロレタリア階級間の完全な信頼と、最も緊密な同盟と、革命的行動のできるだけ大きな統一を闘いとりることが必要であり、マルクス・レーニン主義党の結束を闘いとらねばならない。このためには、プロレタリア階級の隊列内のブルジョア階級の手先である修正主義、現代修正主義、総じて口先では「社会主義」、実際では帝国主義である社会帝国主義と訣別し、闘わねばならない。

(25) ロシア共産党の綱領は、帝国主義の時代とともに日和見主義、社会排外主義として登場し、以降ブルジョア階級独裁の社会的支柱をなしている修正主義の物質的基礎を、次のように正しく特徴づけた。こういう潮流を生み出したのは、先進資本主義諸国家が植民地民族や弱小民族を略奪することによって、ブルジョア階級に、この略奪によって獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリア階級の上層に特権的な地位を与え、それによって彼らを買収し、平時には相当の小市民的生活をこの上層に保障し、この層の指導者を自分の召使いとする可能性を与えているという事情である。

(26) 現代修正主義は、社会主義国では、プロレタリア階級独裁と社会主義継続革命を放棄し、官僚ブルジョア階級独裁と資本主義を復活させた。ソ連は社会帝国主義として登場し、世界革命に敵対し、世界支配を目指している。現代修正主義は帝国主義国では、修正主義と物質的基礎は同一であり、暴力革命とプロレタリア階級独裁を放棄し、議会主義、改良主義に転落している。植民地国では、民族解放闘争の主導権をブルジョア階級に譲り渡し、新植民地主義に屈服している。これと訣別し、闘争しなければならぬ。

(27) 世界プロレタリア共産主義革命の終局の勝利のためには、世界単一のマルクス・レーニン主義党が必要であり、単一の世界プロレタリア階級独裁が必要である。現在、国際共産党は存在していないが、現代修正主義、社会帝国主義と原則的に断乎として手を切り、仮借なく闘争しているマルクス・レーニン主義党は、アジアの社会主義国をはじめとっていくつかの国に存在している。世界プロレタリア共産主義革命の発展は、全世界でマルクス・レーニン主義党の結成と成長を促し、その国際的統一を促さずにはおかない。

(『長征』創刊号一九七九年十月より抜粋)

(iii) 共産主義者同盟紅旗派の「綱領」

II 帝国主義と世界プロレタリア革命

(12) 生産および資本の集積と集中の過程は、

二十世紀初頭に、自由競争を独占に転化し経済生活全体で決定的な意義をもつようになつた強大な独占的資本家団体—シンジケート、カルテル、トラストを成立させ、途方もなく集積された銀行資本と産業資本とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させた。全世界がもつとも富裕な諸国のあいだに、すでに地域的に分割されつくし、国際トラストによる世界の経済的分割が始まつた。これは、資本主義諸国家のあいだの闘争を不可避的に激化させる金融資本の時

代、帝国主義の時代である。

(13) ここからして帝国主義戦争が、すなわち販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり世界支配のため、弱小民族にたいする支配権のための戦争が不可避的に生じる。第一次および第二次帝国主義世界大戦こそ、まさにそういう戦争であった。

(14) 帝国主義は、民族的抑圧と略奪、併合への志向を著しく強め、飢えにあえぐ植民地、半植民地、被圧迫従属諸国を生みだし、地上の大多数の住民を支配のくびきにしばり

つけた。それは、世界的規模で、帝国主義にたいする民族解放闘争を強めざるをえない。

(15) 世界資本主義一般がきわめて高い発展水準に達していること、独占資本主義が自由競争にとつて代わつたこと、銀行ならびに資本家団体によって物資の生産と分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と、労働者階級にたいする独占体の圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争が巨大な障害に面していること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落を生みだしていること、それとともに労働者階級、被搾取労働大衆の反抗が強まっていること—すべてこれらのことは、資本主義の破綻と、より高度の型の社会経済への移行とを、避けられないものにした。

(16) 世界資本主義が到達したこのような発展段階にあつては、帝国主義戦争は、不可避的に、プロレタリアートを先頭とする被搾取労働大衆のブルジョアジーにたいする内乱に転化した。一九一七年ロシア十月革命は、世界プロレタリア共産主義革命のはじまりをつげた。

(17) 帝国主義が植民地民族や弱小民族を略奪

することによって、ブルジョアジーは、この略奪によって獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリアートの上層に特権的地位をあたえ、それによって彼らを買収し、平時には相当の小市民的生活をこの上層に保障し、この層の指導者を自分の召使い、労働代官とした。こうした事情は、労働運動の内部に、日和見主義と社会排外主義の潮流を生みだした。日和見主義は、プロレ

III

世界プロレタリア共産主義革命の時代と世界プロレタリア独裁

⑱ ロシアにおいてプロレタリア独裁が樹立され、全世界における帝国主義と搾取者に対するプロレタリア・被搾取労働大衆の反抗がいちぢるしく強まり、プロレタリアートの国際的結束は飛躍的に強化された。こうした中で、ロシア共産党をはじめとする革命的潮流は、社会民主主義の潮流と断固として手をきり、それと仮借なく闘うことによって共産主義インターナショナル（国際共産党）を創設した。

⑲ さらに、植民地、半植民地、被圧迫従属諸国において、労働者・農民を中心とした

リア独裁を否定し、社会改良のスコリーガンで労働運動を階級協調に導くことによつて労働者を永遠に奴隷の地位にしぼりつけるものにほかならない。日和見主義の成長した社会排外主義は、口先での社会主義、実際の排外主義であつて、総じて自国ブルジョアジーの略奪者の利益の擁護を祖國擁護のスコリーガンでおおいかくすものである。

帝国主義にたいする闘争もまた大きく発展し、国際共産党と国際プロレタリアートの革命運動と緊密に結びつくことによつて、世界プロレタリア共産主義革命の環に転化した。これら諸国の多くに共産党が誕生し、民族革命運動を指導することによつて民族解放闘争の勝利を、ひきつづき社会主義に向けて発展させる可能性が生み出された。プロレタリアートの闘争は、文字通り、世界的なものになり、地上の大多数の住民、被抑圧民族、被搾取労働大衆をひきよせるものとなった。

⑳ このように、プロレタリアートと被搾取労働大衆、被抑圧民族の攻撃が増大し、いくつかの国でプロレタリアートが勝利したことによつて、帝国主義ブルジョアジーは国際的統合の新しい諸形態をつくりだして、その結束と反撃をつよめた。第二次大戦後、国家独占資本主義がいちぢるしく発達し、一つの巨大な帝国主義、アメリカ帝国主義が、他の帝国主義諸国さえも、政治的・軍事的・経済的に自己のくびきにしぼりつけ、ますます強まる革命と民族解放闘争を圧殺するために、これら諸国を国際反革命体制（NATO、日米安保、IMF、国際連合など）に統合した。帝国主義は、プロレタリア諸国を政治的・軍事的・経済的に封じ込め、すべての国のプロレタリア人民の革命運動を直接に鎮圧するとともに、世界的な規模で、系統的に人民を搾取することに力を注いでいる。

しかしながら、こうした過程は、帝国主義の寄生性と腐朽をいっそう強め、諸列強の矛盾・対立を深め、階級対立を激化させるものであり、帝国主義の歴史的な没落を示すものにほかならない。

㉑ 民族解放闘争の発展によつて、植民地・半植民地の多くが政治的独立を闘いと、その少なからぬ部分が労働者農民の革命的独裁を打ち立て、ひきつづき社会主義にむ

けて歩みはじめた。これにたいし帝国主義ブルジョアジーは、これらの発展をおしとどめるため、あらゆる暴力的手段をもちいるだけでなく、被圧迫従属諸国の搾取階級を懐柔し、支配を強化した。

㉒ 世界プロレタリア共産主義革命の一時的な敗北、後退の中でロシア共産党内部に現代修正主義の潮流が発生・成長しプロレタリアート独裁のブルジョア独裁への変質が始まり、資本主義が復活・発展した。

現代修正主義は、社会主義の名で、プロレタリアートの階級独裁と階級闘争を放棄するものである。

今日のソ連は「全人民の国家・全国民の党」の旗をかかげてブルジョア独裁を履行し「社会主義」と資本主義の永遠の平和共存の主張のもとに、帝国主義と結託して国際プロレタリアート、被抑圧民族の闘争を抑圧しているばかりか、その闘いを利用して、帝国主義と世界支配のための争奪をおこなっている。それは、口先での社会主義、実際の帝国主義、すなわち社会帝国主義である。

多くの諸国の公認の共産党もまたこれに追随して、平和共存・平和革命の主張のもとに、公然とプロレタリアート独裁を放棄し、マルクス主義の革命的学説を踏みにじり、社会帝国主義の一大潮流を形成してい

る。

議会を通じた平和革命、帝国主義と社会主義の永遠の平和共存、資本主義のもとでの軍備縮小などの主張は反動的なユートピアであるばかりか、プロレタリアート・被搾取労働大衆を露骨に欺瞞するものであり、プロレタリアートを武装解除し、搾取者の武装解除という任務からプロレタリアートをそらせることを目的とするものである。

㉓ 今日、アジア・アフリカ・ラテンアメリカにおいて民族革命が爆発・発展し、ソ連現代修正主義と断固として手を切った中国共産党をはじめプロレタリア諸国において社会主義社会建設が前進している。そして相対的安定期がおわり、激動の時代に突入した帝国主義諸国において、プロレタリアートの反抗が増大している。

ソ連社会帝国主義は、西側帝国主義との世界支配のための争奪を激化させ、中国との対決をつよめ、民族革命につけこみ、新植民地支配と他民族抑圧を世界各地で拡大強化している。

革命と民族解放の前進と、ソ連社会帝国主義の勢力拡張に後退を余儀なくされてきた米帝を中心とする西側帝国主義列強は、相互に対立を激化させ、国際反革命体制を動揺させながらも反攻をつよめつつある。

しかし、帝国主義・社会帝国主義の策動

も、全世界のプロレタリアート人民・被抑圧民族の反撃に直面して思うにまかせないでいる。

こうしたことから、民族解放と革命が、いぜん発展しているが、しかし、帝国主義世界大戦の要素もまた、つよまっていると言えらる。

革命が戦争をおし止めるか、戦争が革命をひきおこすか、いずれにせよ、個々の国の内乱と自己を防衛するプロレタリア諸国、および被抑圧諸国民の帝国主義、社会帝国主義にたいする革命闘争、革命戦争が結びつくことはさげられない。

㉔ 帝国主義がつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、世界プロレタリア共産主義革命であり、そのため不可欠の条件は、世界プロレタリア独裁である。世界プロレタリア共産主義革命の前進と究極の勝利のためには、社会民主主義のみならず、現代修正主義、ソ連社会帝国主義と断固として手を切り、仮借なく闘うことが不可欠であり、国際共産党を再建することが急務となつてい

る。

革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがあろうと、また反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利はさげられない。

火 花 第 二 九 号

発行日 一九八四年一月十五日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定 価 三〇〇円